

42th Tokyo Art-Educational Seminar

だから美術を学ぶんだ。

第42回東京都中学校美術教育研究大会

第4ブロック(文京・豊島・板橋・北)板橋大会 研究紀要

ご挨拶

板橋区教育委員会

教育長

長沼 豊

令和7年度第42回東京都中学校美術教育研究大会第4ブロック板橋大会の開催を、心よりお祝い申し上げます。

本研究大会は、「だから美術を学んだ。」を大会テーマとし、生徒が美術を学ぶ意義について、「感性を研ぎ澄ませる」「わたしたちを理解するために」「できた！をつなげる」の3つの分科会に分かれて探究してこられた成果を共有し合う、極めて意義深い機会であります。

近年、インターネットやSNSの普及、AIやIoTなどのテクノロジーの急速な進化により、子どもたちは多くの情報に日々さらされて生活しています。そのような社会の中で、絵を描いたり物を作ったりすることは、言葉を超えて心の奥底にある思いや感情を可視化し、自分自身を表現する大切な行為であると考えます。

また、美術を学ぶことは自己表現にとどまらず、対象とじっくり向き合うことで培われる観察力や感受性、多様な価値観に触れることで養われる共感性や他者とのコミュニケーション力、そして正解が一つではない学びの中で育まれる創造力など、総合的な力を育てる教育活動でもあります。単に技術を学ぶだけでなく、「よりよく生きる力」を育む美術教育の在り方に改めて光を当てる今回の研究は、中学校美術教育の一層の充実・発展に大きく寄与するものと確信しております。

中学校における美術教育は、生徒が生涯にわたって生活や社会の中で美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育みながら、人間形成の一層の深化を図るものです。本大会での研究成果が全都に広がり、今後の子どもの学びの充実につながることを心より期待しております。

結びに、本研究大会の開催にあたり御尽力いただきました東京都中学校美術教育研究会会長渋谷里美様をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、東京都中学校美術教育研究会のますますのご発展を祈念いたしまして、挨拶いたします。

東京都中学校美術教育研究会

会長

立川市立立川第五中学校

校長

渋谷 里美

第42回東京都中学校美術教育研究会第4ブロック大会の開催にあたり、板橋区・文京区・豊島区・北区の各教育委員会をはじめ関係者の皆様方のご尽力とご支援に心より感謝申し上げます。

本会では発足以来、時代の変化とともに求められる美術教育の在り方について、常に深く探究を続けてまいりました。近年、教育現場では多様化する価値観や情報化の波を受け、「生きる力」の根幹を培う教育が強く求められています。こうした背景のもと、本大会が、単なる知識伝達ではない、真に子どもたちに寄り添う美術教育の姿を示すものとなることを期待しております。

本大会は、「だから美術を学んだ。」という、美術教育の本質的な価値を問い直す力強いテーマを掲げています。AI技術の進化や予測不可能な社会情勢の中、私たちは、子どもたちが自らの感性で世界を捉え、創造的な思考をもって課題を解決していく力を育む必要性を強く認識しています。このテーマは、美術の学習が単なる知識や技術の習得にとどまらず、子どもたち一人一人が自分らしく生き、未来を切り拓くための根源的な力を養う重要な教育活動であることを再認識する機会を与えてくれました。美術科が育成する非認知能力や協働の精神は、社会の多様な課題に向き合う上で不可欠な要素です。第4ブロックの皆様はこのテーマのもと、実践と研究の成果を、本大会で発表されます。学習指導要領の趣旨を踏まえつつ、子供たちの内なる表現意欲を引き出し、主体的な学びを実現するための工夫に満ちた実践例は、参加される多くの先生方にとって、日々の授業を深める大きな示唆を与えるものとなるでしょう。

このリーフレットには、本大会に向けた教員の思いと工夫が随所にちりばめられています。お手にされた皆様方が研究内容を深く読み解き、これからの美術教育を共に描きながら、さらに深い探究へと踏み出すための実り多い対話の一助となることを願ってやみません。

結びに、本大会が参加される全ての先生方にとって、美術教育の本質的な価値を共有し合い、明日からの授業への活力を得る場となることを心より期待申し上げます。大会の成功に向けてご尽力いただいた関係者の皆様に、重ねて御礼申し上げます。

第42回東京都中学校美術教育研究大会

実行委員長

板橋区立西台中学校

校長

内田 善人

一昨年度の杉並大会では、副実行委員長として渋谷会長のもと大会運営に携わり、多くの先生方からご意見を伺いながら「なぜ、美術を学ぶのか。」というテーマを掲げました。美術科の授業を通して生徒たちにどのような力を育むのか——これは、時代を問わず私たち美術科教員が常に向き合い続けてきた問いです。題材づくり、導入の工夫、生徒の「わからない」「難しい」という声への向き合い方、評価の方法や説明の仕方。その一つ一つの場面で、私たちは立ち止まり、「私は教壇で何を伝えているのだろう」と振り返らざるを得ません。

美術は、育成する力が見えにくい教科だと言われます。だからこそ、「だから美術を学んだ。」という答えを求め続け、共に語り合う場が必要なのだと思います。「こうあるべきだ」「これも一つの在り方だ」「こんな方法があるのか」という気付きを互いに確かめ合い、高め合う。その営みを止め、かつて自分が受けた授業の模倣を繰り返すだけでは、学びは更新されません。

例えば、こんな授業があります。生徒たちが集中して粘土で器を制作しています。黒板には丁寧な手順が示され、上級生の見本作品が置かれています。「何を作っているの?」「なぜこの形にしたの?」と尋ねると、生徒からは「先生にそう言われたから。」「見本通りに。」という言葉。指導者に題材の意図を伺うと「器を作る授業です。」という回答……。目的も思いも共有されず、ただ上手に形を整えることが求められているような授業は、少なくない現場で見られます。そこで私たちは生徒に向かって「上手につくると嬉しいから美術を学んだ」と言うのでしょうか。

本大会では、ぜひ参加者全員に自らへ問い直してほしいと思います。

「なぜ私は美術を教えているのか。」

「どんな力を育てようとしているのか。」

その問いを踏まえて、日々の実践を振り返り、教室で生徒に胸を張って語ることでできる自分なりの答え——「だから美術を学んだ。」——を見つけていただければ幸いです。

結びに、本研究大会開催に当たり、東京都教育委員会、第4ブロック教育委員会をはじめ、各区中学校長会、関係諸機関の皆様にご感謝申し上げ、挨拶とさせていただきます。

基調提案

大会テーマ：「だから美術を学んだ。」

大会研究局長 板橋区立中台中学校 原 順 子

1. 大会テーマについて

「美術を学ぶ」ことへの目的や意義については、美術教育に携わる多くの人々によって議論が重ねられ、時代の変化とともに見直されながら、「学習指導要領」という形で、私たち教師が指針とすべき目標や授業内容が示されてきました。現在、中央教育審議会では、生成 AI などデジタル技術の進展に対応し、子どもの特性に応じた多様な学びを重視する方針のもと、2030年度の施行を目指して学習指導要領の改訂が進められています。

本大会テーマ「だから美術を学んだ。」は、これまでの研究大会テーマの流れを踏まえて設定しました。

令和5年度大会では「なぜ美術を学ぶのか」をテーマに、教師が美術を学ぶ意義を問い直し、生徒が主体的・対話的に学びながら感性を育てる実践を重ねました。また、令和6年度大会では「主体的に創造し表現する生徒の育成」をテーマに、生徒が自ら考え、創り、表現する力を育む実践を進めました。今年度は、これらの成果を踏まえ、「美術を学ぶことで育まれる力」に改めて目を向けます。特に、想像力や感性といった、人が人らしく成長するために欠かせない力に焦点を当て、その価値をもう一度見つめ直します。そして、変化の激しい現代社会において、これからの時代に求められる美術教育のあり方を、もう一度考える機会としたいと思います。

2. 「美術を学ぶ」意義について

「美術を学ぶ」意義は、他の教科と同様に、人間が成長していく上で必要な能力を育むことにあります。過去2年間の大会でも美術教育の大きな役割として、感性や創造力、さらに非認知能力の涵養に焦点が当てられ、分科会では美術科の授業力向上に資するための提案が行われました。

今回の分科会でも、感性や創造力は、美術教育が育む重要な要素として挙げられており、その重要性は今後も変わることなく続くと考えます。もちろん「美術を学ぶ」意義を表す言葉には、観察力や表現力の涵養など多様なものがありますが、本大会テーマ「だから美術を学んだ。」には、私たち教師が美術教育を通して育む数多くの価値を見つめ直し、その意義を深く理解し、新たな気づきを得て授業の工夫や改善へとつなげていくという願いが込められています。さらに、そのことを通して、子どもたちが「美術を学ぶ」ことの楽しさを知り、積極的に美術や芸術作品に触れる機会が増え、心豊かに生きる力を育むことを目指しています。

今回の分科会テーマ、A「感性を研ぎ澄ませる」、B「わたしたちを理解するために」、C「できた！をつなげる」は、それぞれ「美術を学ぶ」意義を多面的に捉え、子どもたちの成長へ導く授業づくりの研究を通して、本大会テーマ「だから美術を学んだ。」へと繋がる気付きを得る内容となっています。

3. 分科会テーマについて

A「感性を研ぎ澄ませる」身の回りにある豊かさ気付く授業

自分に意識を向けて、感性や触覚など、自分の豊かさを感じることを目標とします。日常では得がたい経験を通して、生きていく上で大切な感覚を研ぎ澄ませ、その結果としての表現活動が、作品となり生徒に学びの実感をもたらします。その過程で自分への理解を深め、思いや考えを言語化し、相互のやりとりを通して学びが広がる授業を目指します。

B「わたしたちを理解するために」自己理解と他者理解を深める授業

本来、美術は言葉にできない感覚を色や形などで表す営みです。美術の時間は自分(たち)を理解するために徹底的に向き合う時間ともいえます。正解のない問いに対して自分なりの答えを見つけ出し、考えながら表し、表しながら考える。その中で、他者の表現に触れ、視野を広げ、自己理解と他者理解を深める授業づくりを目指します。

C「できた！をつなげる」自己の創造力への肯定感を自己肯定感につなげる授業

問題解決ではなく、正解のない問いに向き合う時間を通して、あるがままを受け入れる寛容な人間性を育てたい。生徒が授業を通して実感を積み重ねて、自分なりの解釈を形成することができたなら、他の作品に対しても理解してみたいという興味が湧いてきます。そうした体験を通して、柔軟性や前向きに生きる力を育くみ、『できた！』という喜びや意欲につながる授業を目指します。

4. 最後に

基調提案の終わりに、本大会テーマ「だから美術を学んだ。」にも繋がる、心に残る言葉を紹介합니다。

日本を代表する彫刻家・佐藤忠良氏は、『美術を学ぶ人へ』の中で次のように述べています。

この芸術というものは、科学技術とちがって、環境をかえることができないものです。

しかし、その環境に対する心を変えることはできるのです。詩や絵に感動した心は、環境にふりまわされるのではなく、自主的に環境に対面できるようになるのです。

ものを変えることができないものなど、役に立たないむだなものだと思っている人もいます。

ところが、この直接役に立たないものが、心のビタミンのようなもので、しらすしらすのうちに、私たちの心の中で蓄積されて、感ずる心を育てるのです。

人間が生きるためには、知ることが大切です。同じように感ずることが大切です。

私は、みなさん一人一人に本当の喜び、悲しみ、怒りがどんなものかがわかる人間になってもらいたいのです。

美術をしんけんに学んでください。しんけんに学ばないと感ずる心は育たないのです。」

(佐藤忠良, 他「少年の美術」現代美術社 1984 年より抜粋)

佐藤氏のこの言葉は、まさしく時代を超えて「美術を学ぶ」意義の本質を示しているのではないのでしょうか。本大会が、私たち教師一人一人にとって「美術を学ぶ」意義について再確認し、「美術教育」のもつ人間の成長への可能性を考える機会となり、今後の授業実践のさらなる充実へとつながることを願っています。



詳しくはこちらへ

さわって楽しむ絵 一本物を鑑賞することで得られる豊かさー

(板橋区立美術館と協働開発した授業)

[領域] A 表現(1)ア(ア)(2)ア(ア)(イ)、B 鑑賞(1)ア(ア)、共通事項(1)ア、イ

[対象] 北区立浮間中学校

[授業者] 教諭 金原 たかね

1 題材の概要

本題材は、生徒が美術の価値を実感し、社会とつながる学びを目指して板橋区立美術館と協働開発した。実物鑑賞を重視し、あえて「触覚」に焦点を当てることで、視覚に限定されない豊かな感性を育むよう工夫した。また美術館との連携を通じ、授業での気づきが生涯学習へと発展する教育実践を目指した。

2 題材目標

触覚と感情の関わりや素材の特性を理解し、見通しを持って創造的に表す技能を習得する。さわる絵本の制作を通じ、質感を生かした構成や社会を豊かにする美術の働きを考え、主体的に表現・鑑賞の活動に取り組む。

3 指導計画 [全14時間]

| 時間 | ねらい | 活動内容 |
|------|------------------------------------|---|
| 1～4 | 素材の質感や触感が感情に与える効果を理解し、表現の意図を深める。 | 「さわる絵本」を鑑賞し、触感サンプルの作成を通して素材の特性を体感する。 |
| 5～7 | 鑑賞での気づきを生かし、形や仕掛けがもたらす効果を考え主題を練る。 | 触感の効果を確かめながら試作を行い、全体の構成を考えたアイデアスケッチや構想をまとめる。 |
| 8～14 | 創意工夫して作品を完成させ、互いの表現の意図や工夫を味わい交流する。 | 制作プロセスの記録を取りながら「さわる絵本」を完成させ、相互鑑賞を通して見方や感じ方を深める。 |

4 材料・用具

素材(紙、段ボール、梱包材、布、綿、モール、ファスナー、卵パック、ワインコルク等)、絵の具セット、色鉛筆、裁縫セット、接着剤、タブレット端末、クロッキー帳、ほか

5 指導にあたって

- ・「さわる絵本」による鑑賞活動 プロの作品を、アイマスクを用いた目隠し状態で鑑賞。美術館借用の本物に触れる特別な体験を通じ、触覚的な表現の工夫や楽しさを実感させる。
- ・材料の性質と質感の可変性への気づき 素材の硬軟や温冷が感情に与える影響を理解させる。実際に手を触れ、加工や組み合わせによる質感の変化(可変性)を確かめることで、素材に対する感度を高める。
- ・主題、意図に応じた環境づくり 試作を経てから構想を練る手順で表現意図を明確化。生徒の持参物に加え、多様な材料や接着剤を常備し、自ら表現形式を選択、工夫できる環境を整える。
- ・ICTによる鑑賞と表現の一体化 「さわる絵本」の工夫をスライドで共有。クラスメイトの発表内容をいつでも閲覧可能にすることで、鑑賞での気づきを自身の制作(構想)に直接つなげる。



「さわる絵本」の鑑賞



素材の特性を生かして制作する



お互いの創意工夫を味わう

ポスターセッション



詳しくはこちらへ

こころのシミ(墨) ー水墨画の技法を用いて感情を表そうー

[全6時間]

[授業者] 板橋区立高島第二中学校 教諭 中山 朋子

1 題材について

美術を生活の一部と捉え、墨の濃淡等を用いて日常の感情を抽象表現する。墨と水に感性を研ぎ澄ませて自己と向き合い、作品の共有を通じて自己・他者理解を深め、日常に潜む美しさに共感する資質・能力を養う。

2 材料用具 パレット、毛氈、文鎮、半紙、水墨画用紙、墨汁、毛筆、刷毛、新聞紙、水入れ

3 指導にあたって

- ・生徒理解 日常の感情と向き合う時間を確保し、最大 8 枚の試行錯誤を通して、失敗を恐れず自己実現を促す。
- ・指導技術 基礎技法から「感情の線」へと段階的に指導。班体制での交流を通じ、技術の学び合いと相互理解を深める。
- ・主体的、対話的で深い学び 多めの枚数設定で大胆な実験を促し、制作途中や完成後の対話的な鑑賞を通じて、自己の表現を客観的に見直させる。



墨の濃淡や表現で感情を表す



実践発表

“座る”を考える ―私たちの日常をデザインする―

〔領域〕 A 表現(1)イ(ウ)、(2)ア(ア)(イ) B 鑑賞(1)ア(イ) 共通事項 (1)ア、イ

〔対象〕 板橋区立高島第一中学校

〔授業者〕 教諭 松橋 康憲

1 題材の概要

“座る”という無意識の行為をリサーチや制作を通して問い直し、マケットとして形にした。この活動は、単なる造形を超え、自身の生活背景や社会的な行動様式を感性で捉える試みである。プレゼンを通じた他者との共有により、無意識の感情を可視化して「私たち」を深く理解し、世界を豊かに生きる資質・能力を養う。

2 題材目標

素材の特性や形状が感情に与える効果を体験的に理解し、材料や用具を最大限に生かした創造的な表現技能の習得に取り組む。使用条件や機能性、美しさを多角的に検討して独創的な構想を練り、作品の意図や工夫を深く考察する鑑賞力を養う。制作と鑑賞の両面から、試行錯誤や他者との意見交換を楽しみ、生活を豊かにするデザインの本質について、主体的に探究し続ける姿勢を育むことを目指していく。

3 指導計画 [全15時間]

| 時間 | ねらい | 活動内容 |
|------|-------------------------------------|---|
| 1～2 | 座る体験を通して素材や形の特性、デザインの歴史的背景を理解する。 | 校内の様々な場所で“座る”をリサーチし、椅子に関するレポート作成や鑑賞を行う。 |
| 3～6 | 使用場面や目的を想定し、自分なりのコンセプトをデザイン画に落とし込む。 | アイデアスケッチを制作し、友人との意見交換を経て具体的なデザイン画を仕上げる。 |
| 7～15 | 創意工夫を重ねて立体を造形し、その意図を他者へ伝える。 | マケット(模型)とプレゼンボードを制作し、作品の展示・相互鑑賞・講評を行う。 |

4 材料・用具

教科書、資料集、筆記用具、アクリル絵具、タブレット端末、制作に必要な材料と道具

5 指導にあたって

- ・**生徒理解** 鑑賞や体験を通じ、椅子を再定義することで固定観念にとらわれず、日常生活でも問いを持つ姿勢を育み、他者との交流で多様な価値観を学ぶことで、多角的な視野と深い自己理解を促す。
- ・**指導技術** 本物の椅子に触れる環境で創造性を刺激し、体験で得た課題をスケッチで解決する「デザイン思考」を導入する。マケット制作では既成概念に縛られない挑戦を奨励し、試行錯誤から解決策を導く展開を重視する。
- ・**主体的、対話的で深い学び** 対話を通じて自身のアイデアを客観視し、新たな着想を得る環境を整える。失敗を恐れぬ試行錯誤を肯定し、実用的な課題の本質を探究させることで、表面的な制作に留まらない、思考の深化を伴う学びとする。



実体験を通してリサーチする



マケットにアイデアを落とし込む



それぞれの“座る”よさを味わう

ポスターセッション

詳しくはこちらへ



あいのかたち ―石彫で表すそれぞれの愛の表現―

[全13時間]

〔授業者〕 板橋区立志村第一中学校 教諭 石井 紗帆

1 題材について

滑石を彫り「愛」という抽象的な感情を可視化する活動を通じ、自己の内面と他者との関わりを見つめ直していく。自己理解を深め、多様な価値観に触れることで他者理解を促し、美術が心をつなぐ営みであることを学ぶ。

2 材料用具

タブレット端末、ワークシート、トレーシングペーパー、カーボン紙、金工ノコギリ、ヤスリ各種、印刀、ニードル、篆刻バイス、トレー、新聞紙、布(ウエス)、耐水ペーパー(#400、#800、#1000)



制作を通して「あい」を考える

3 指導にあたって

- ・**主題への理解を深める** 「恋愛」以外の多様な愛(友愛・家族愛・自己愛など)や、愛の多面的な性質(与える・すれ違う等)に目を向けさせる。Figma 等での対話を通じて思考を深めつつ、繊細な主題であることを踏まえ、他者への配慮を徹底させる。
- ・**抽象表現への理解を深める** 作品鑑賞を通じ、造形的特徴から作者の意図を想像させ、抽象表現への理解を図る。制作においては、石という素材の特性(素材感)を自身の意図と結びつけ、表現に活かす意識を持たせる。
- ・**アイデアスケッチと制作にあたって** 「ハート」などの安易な記号を避け、独自の表現を追求させる。石彫は「減算の技法」であり修正が困難なため、耐久性や作業時間を考慮し、構造的に無理のないシンプルかつ力強い形を構想するよう指導する。



実践発表

〇〇なみかん ―色彩学習を活用した立体作品制作―

〔領域〕 A 表現(1)ア(ア)(2)ア(ア)、B 鑑賞(1)ア(ア)、共通事項(1)ア、イ

〔対象〕 北区立十条富士見中学校

〔授業者〕 教諭 神戸 神奈

1 題材の概要

二次元から三次元への表現展開を通じ、みかんの特徴を捉えた立体制作を行う。既習の観察力や色彩知識を活かし、「〇〇なみかん」という主題から発想・構想する力を養う。中学校美術への不安を抱える生徒に対し、ICT 活用や資料提示による明確な支援を行い、「できた」という成功体験から自己肯定感を高める。1 年次で創造の楽しさを学び、次年度以降の機能性や躍動感を追求する造形学習へとつなげる土台を築く。

2 題材目標

形や色彩、材料の特性を理解し、用具を適切に用いて意図に応じた表現を行う。みかんの観察や想像から主題を生成し、構成を工夫して構想を練るとともに、作品の意図や美しさを捉えて見方・感じ方を広げる。創造の喜びを味わいながら、「〇〇なみかん」の表現や鑑賞の学習活動に主体的かつ心豊かに取り組む。

3 指導計画 [全8時間]

| 時間 | ねらい | 活動内容 |
|-----|-------------|--------------------------------------|
| 1 | 主題の生成・テーマ決定 | 「〇〇なみかん」という自分だけのテーマを決め、完成イメージを固める。 |
| 2～5 | あらづくり・質感の表現 | 果肉や皮の質感の違いを意識し、ヘラや歯ブラシを活用して細部まで作り込む。 |
| 6～8 | 着色・ニス・完成 | 絵の具とニスで仕上げ、名札を作成して作品を完成させる。 |

4 材料・用具

タブレット端末、粘土、粘土板、粘土へら、小皿、歯ブラシ、新聞紙、クリアファイル

5 指導にあたって

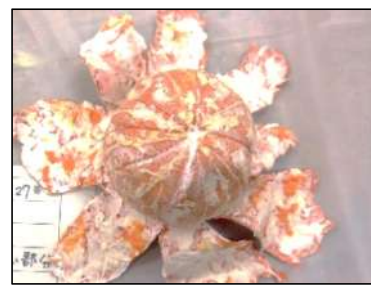
- ・**生徒理解の視点** 美術への苦手意識に配慮し、長期的な視点で一人ひとりのペースや興味を尊重した支援を行う。成功体験を積み重ねることで自己肯定感を高め、早期完成者には主題に沿った質感の追求など発展的な課題を提示して学びを深化させる。生徒同士が助言し合い、互いの良さを認め合いながら学びを深める授業環境を構築する。
- ・**指導技術(授業展開)** 全 8 時間の中で、ICT を活用した多角的な観察や実物投影により発想を広げさせる。題材として表現の多様性に富む「みかん」を選定し、色彩活用力と造形的発想力を育成する。導入で制作の見通しをもたせ、鑑賞活動では主題を明示した相互鑑賞を通じて表現意図を共有し、尊重し合うことで創造活動への意欲継続を図る。



三原色を基に実際の色に近づけていく



みかんの質感を表現する



お互いのよさを味わう

ポスターセッション

詳しくはこちらへ



「象徴から読み解く鑑賞 -フリーダ・カーロ『いばらの首飾りとハチドリ』の自画像』から-」 [全1時間]

〔授業者〕 豊島区立 千歳橋中学校 教諭 河内 なつ

1 題材について

フリーダ・カーロの自画像を題材に、造形的特徴やモチーフの象徴性を読み解く。Which 型課題や ICT での共有を通じ、主体的な選択と根拠の言語化を促す。自らの見方の変容を自覚させ、次時の自画像制作へと繋げる。

2 材料用具 筆記用具、タブレット端末、ミライシード

3 指導にあたって

- ・**「生徒理解」の視点** 内面が揺れ動中 3 生に対し、感情をモチーフに託して象徴化する手法を提示する。直接的な表現を避けつつ「自分らしさ」を考える契機とし、共感的な他者理解の育成を図る。
- ・**「指導技術(授業展開)」の視点** 部分から全体を読み解くプロセスを構成し、直感と解釈の差異から深い鑑賞へ導く。ICT 活用や動画教材により思考を可視化・共有し、次時の自画像制作へ繋がる学びを構築する。
- ・**「主体的、対話的で深い学び」の視点** 自らの感性で作品を読み解く主体性を重視する。他者の意見や複数の解釈に触れ、根拠を基に対話することで、自己の考えを再構築し、自身の表現へと昇華させる深い学びを実現する。



象徴から作品を読み解く



「なぜ今、美術が必要なのか」

人類学者 武蔵野大学客員教授 竹倉 史人 様

著書『土偶を読む 130年間解かれなかった縄文神話の謎』『土偶を読む 図鑑』

『世界の土偶を読む コスチェンキの精霊はなぜ30000年前のユーラシアの森で捕縛されたのか?』

賞歴 第43回サントリー学芸賞 みうらじゅん賞(2021年)

大会実施要項・スケジュール

大会実施要項

- 大会テーマ『 だから美術を学ぶんだ。 』
分科会テーマ A「 感性を研ぎ澄ませる 」
B「 わたしたちを理解するために 」
C「 できた！をつなげる 」
- 日時 令和8年2月6日(金) 13:30~16:30
- 会場 板橋区立西台中学校 東京都板橋区高島平1丁目4-1
都営三田線「西台駅」より徒歩10分
(1) 体育館…全体会、ポスターセッション、教材展示
(2) 9年生教室…実践発表、作品展示、研究協議会

4 時 程

I. 全体会①

13:30~14:00

| | | | |
|---------|--------------|-----------------|--------|
| 開会の言葉 | 大会副実行委員長 | 板橋区立上板橋第三中学校副校長 | 平賀 公章 |
| 主催者挨拶 | 都中美会長 | 立川市立立川第五中学校長 | 渋谷 里美 |
| 実行委員長挨拶 | 大会実行委員長 | 板橋区立西台中校長 | 内田 善人 |
| 来賓挨拶 | 板橋区教育委員会 | 教育長 | 長沼 豊 |
| | 東京都教職員研修センター | 教育経営課 指導主事 | 長里 祐花 |
| 来賓紹介 | 司会者 | 文京区立文林中学校 | 石井 恵美子 |
| 基調提案 | 大会研究局長 | 板橋区立中台中学校 | 原 順子 |

II. 教材展示・ポスターセッション

14:00~14:20

<ポスターセッション>

| | | |
|---|-------------|-------|
| A 分科会「こころのすみ(墨) —水墨画の技法を用いて感情を表そう—」 | 板橋区立高島第二中学校 | 中山 朋子 |
| B 分科会「あいのかたち —石彫で表すそれぞれの愛の表現—」 | 板橋区立志村第一中学校 | 石井 紗帆 |
| C 分科会「象徴から読み解く鑑賞 —フリーダ・カーロ《いばらの首飾りとハチドリ》の自画像》から—」 | 豊島区立千登世橋中学校 | 河内 なつ |

<協賛企業>

開隆堂出版株式会社、日本文教出版株式会社、光村図書出版株式会社、株式会社アーテック、(株)彩光社、株式会社サクラクレパス、株式会社サンワ クラフテリオ事業部、新日本造形株式会社、ターナー色彩株式会社、日本色研事業(株)、(株)美術工芸センター、株式会社美術出版エデュケーション、ペンてる(株)、理想科学工業株式会社

III. 実践発表・協議会

14:30~15:00

| | | |
|-------------------------------------|-------------|--------|
| A 分科会「さわって楽しむ絵 —本物を鑑賞することで得られる豊かさ—」 | 北区立浮間中学校 | 金原 たかね |
| B 分科会「“座る”を考える —私たちの日常をデザインする—」 | 板橋区立高島第一中学校 | 松橋 康憲 |
| C 分科会「〇〇なみかん —色彩学習を活用した立体作品制作—」 | 北区立十条富士見中学校 | 神戸 神奈 |

IV. 全体会②

15:10~16:30

| | | | |
|-------------|----------------|----------------------|-------|
| 記念講演 | 「なぜ今、美術が必要なのか」 | 武蔵野大学客員教授 人類学者 竹倉 史人 | |
| 謝辞 | 大会副実行委員長 | 板橋区立板橋第五中学校副校長 | 須藤 千絵 |
| 次回大会実行委員長挨拶 | 次回大会実行委員長 | 江戸川区立春江中学校長 | 横枕 耕史 |
| 閉会の言葉 | 大会副実行委員長 | 板橋区立上板橋第三中学校副校長 | 平賀 公章 |

大会運営組織一覧

○総務

| | |
|---------|------------------------|
| 都中美会長 | 渋谷 里美(立川市立立川第五中学校長) |
| 都中美事務局長 | 奥井 伸 (渋谷区立原宿外苑中学校副校長) |
| 大会実行委員長 | 内田 善人(板橋区立西台中学校長) |
| 副実行委員長 | 前田 康夫(板橋区立桜川中学校長) |
| | 須藤 千絵(板橋区立板橋第五中学校副校長) |
| | 平賀 公章(板橋区立上板橋第三中学校副校長) |
| | 久留主ひとみ(文京区立第九中学校副校長) |
| | 柳澤 環 (豊島区立駒込中学校副校長) |
| | 菊池 修一(北区立明桜中学校長) |
| | 川路 美沙(北区立王子桜中学校副校長) |

○事務局

| | |
|----|---------------------|
| 局長 | 静野 亜希子(板橋区立志村第三中学校) |
| 次長 | 石井 恵美子(文京区立文林中学校) |
| 会計 | 玉木 里奈(板橋区立赤塚第二中学校) |
| 局員 | 三木 一樹(北区立王子桜中学校) |
| | 黒澤 友美(北区立滝野川紅葉中学校) |
| | 小笹 鈴奈(豊島区立駒込中学校) |
| | 岩橋 努 (豊島区立明豊中学校) |
| | 東 拓朗(板橋区立志村第四中学校) |
| | 小野寺 慶(板橋区立赤塚第三中学校) |

○編集局

| | |
|----|----------------------|
| 局長 | 中三川 舞(板橋区立板橋第五中学校) |
| 次長 | 大野 里実(北区立赤羽岩淵中学校) |
| 局員 | 加藤 礼子(豊島区立西池袋中学校) |
| | 澤口 絢音(板橋区立上板橋第三中学校) |
| | 三橋 あかり(板橋区立上板橋第二中学校) |
| | 川島 美月(板橋区立上板橋第三中学校) |
| | 内田 聡美(板橋区立赤塚第一中学校) |
| | 湯原 恵美子(板橋区立高島第三中学校) |

○研究局

| | |
|----|--------------------|
| 局長 | 原 順子(板橋区立中台中学校) |
| 次長 | 大黒 洋平(文京区立第九中学校) |
| | 石井 佑季(板橋区立桜川中学校) |
| 局員 | 河内 なつ(豊島区立千登世橋中学校) |
| | 伊澤 桂一(豊島区立巣鴨北中学校) |
| | 神戸 神奈(北区立十条富士見中学校) |
| | 岩崎 彰生(北区立桐ヶ丘中学校) |
| | 金原 たかね(北区立浮間中学校) |
| | 石井 紗帆(板橋区立志村第一中学校) |
| | 松橋 康憲(板橋区立高島第一中学校) |
| | 中山 朋子(板橋区立高島第二中学校) |

○庶務局

| | |
|----|--------------------|
| 局長 | 荒井 千尋(板橋区立西台中学校) |
| 次長 | 今野 裕子(豊島区立池袋中学校) |
| 局員 | 笠 さわ子(豊島区立池袋中学校) |
| | 佐藤 玉恵(北区立王子桜中学校) |
| | 謝敷 治彦(北区立明桜中学校) |
| | 平井 佑実(北区立明桜中学校) |
| | 村上 達茂(北区立明桜中学校) |
| | 小林 怜奈(北区立稲付中学校) |
| | 秋田 雅子(板橋区立志村第二中学校) |
| | 添田 賢刀(板橋区立赤塚第三中学校) |

都中美 WEB サイトについて

<https://totyubi.sakura.ne.jp/>



「都中美」とは、東京都の中学校美術教員で組織する研究団体です。
 主な活動は、年1回の研究大会の開催、研修会や講演会の企画・実施、研究紀要や都中美ニュースの発行などです。
 「都中美」ではこれらの活動を通し、会員が相互に研鑽を深め、日常の実践やその成果について情報交換を行いながら、美術教育の充実に向けてのネットワーク構築に取り組んでいます。

第42回東京都中学校美術教育研究大会 第4ブロック(文京・豊島・板橋・北)板橋大会 研究紀要

だから美術を学んだ。

| | |
|-----|---------------------------|
| 発行 | 令和8年2月6日(金) |
| 発行者 | 東京都中学校美術教育研究会 |
| 代表 | 会長 渋谷 里美 大会実行委員長 内田 善人 |
| 事務局 | 大会事務局長 静野 亜希子 |
| 印刷 | いたばし印刷株式会社 |
| 協力 | 加賀福祉園 |